

日本最大級の地震大津波

平成23年
3月12日

正確な情報で行動を!

M8.8 最大震度7
石巻地方 6強

南浜町、門脇町、倒壊

各地は水没。津波に巻き込まれ行方不明となつてゐる人たちは多く、今後犠牲者は増える見込み。

道路には流されてしまった車が無残な姿で散乱していゝ光景がみられる。

東北地方太平洋沖地震

11日午後2時46分ごろ、三陸沖を震源とする

地震が発生。地震の規模はマグニチュード8.8

最大震度「7」。明治時代に地震観測して以降

最も巨大な地震。石巻地方では「6強」を記録。

まことに津波が押し寄せて沿岸部をはじめ、

各地は水没。津波に巻き込まれ行方不明となつてゐる人たちは多く、今後犠牲者は増える見込み。

道路には流されてしまった車が無残な姿で散乱していゝ光景がみられる。

石巻日日新聞

号外

(12日現在の被害状況)

石巻市災害本部によると

11日午後4時石巻市役所7階が崩落。

駄リ茨城全域が壊滅状態。

同 5時門小が全焼。

北村小は衝撃の中心があり。

同 7:20 航空自衛隊松島基地は

滑走路が浸水し動けず。

同 8:10 天王橋が落下。

12日前 10:35 内海橋陥落。

(火災情報)

11・12日にかけて日和山周辺や

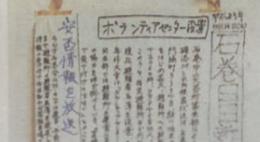
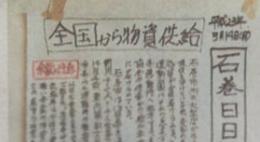
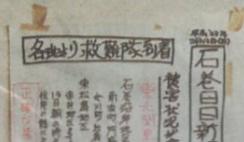
中央・蛇窓地区などで火災相次ぐ。

※石巻市役所では、庁舎外での

炊き出しの協力を市民の皆様に呼びかけています。

胸

輪



3月12日の紙面

▲ 3月12日の紙面

□ 石巻日日新聞 大正元年(1912年)創刊。従業員は約30人で、石巻、東松島、女川の2市1町で、約1万4000部を発行。プランケット判8ページに、行政や事件、事故、スポーツなど地域の話題のほか、貸家や迷い犬、開店セールなど、身近な情報を掲載している。6日分の手書き新聞については、各国の報道に関する資料を展示する米・ワシントンの博物館「ニュージアム」から、「当時の現状を知る上で貴重な資料」として展示依頼があった。

東日本巨大地震で、印刷工場の入る社屋が被災しながら、1日も休まず発行している新聞がある。多数の死者、行方不明者が出ていた宮城県石巻市の地元刊紙「石巻日日新聞」。津波による浸水や停電で、新聞を印刷する輪転機が動かない間、記者たちは手書きで新聞を作つて避難所に貼り出し、被災者に情報を伝え続けた。
(大野潤三、及川昭夫、池尻太一)

24時 地元紙

ひび 石巻日日新聞



6日間の壁

↑ 取材の打ち合わせをする記者たち(22日午後0時9分、宮城県石巻市) 高橋美帆撮影

社屋が大きく揺れ出したのは、11日の新聞制作が終わり、記者たちが翌日の打ち合わせをしている最中だった。柱が左右に揺れ、天井から蛍光灯が落ちてきたり、記者たちは、警察や市役所、石

読者のため

面の明かりで、お互いの顔を照らしあう。

大正元年(1912年)創刊。昭和戦争中を除き、一度も休刊したことはない。読者たちは、横井康彦が灾害対策本部を横井市役所は周

りで水につかり、所にたどりつき、況を取りました。



武内宏之さん

香港と取材の分担を決め、すぐさま外に飛び出した。津波が押し寄せたのは、その直後。1階は床上まで浸水し、停電や断水で輪転機は動かなくなつた。携帯電話もつながらず、外にいる記者6人と連絡が取れない。翌日の発行は断念せざるを得ない状況に陥った。

夜になり、社内に残つて

いた近江弘一社長(52)ら幹部数人が、1階の社長室に

集まつた。暗闇の中、テー

ブルを囲み、携帯電話の画

◇石巻日日新聞◇

【22日】
午前6時

本社に泊まり込んで

壁新聞

に軽て。さない帶転で

◇石巻日日新聞◇

記者たちとなかなか連絡が取れなかつた。出社できた記者は横井康彦さん(23)だけ。災害対策本部が設けられた市役所は周囲が冠水していたが、横井さんは、胸まで水につかりながら市役所にたどりつき、被災の状況を取材した。

輪転機に備え付ける幅約80cmのロール紙を引つ張り出し、長さ約130mで切

水産業界を担当する記者の秋山裕宏さん(30)は22日朝、石巻港を訪れた。復興に向けた漁業関係者の声を聞くためだ。

しかし、陸に乗り上げて山さんは、入社5年目の若

希望

この街の海辺で育った秋山さんは、入社5年目の若



秋山裕宏さん

◆石巻日日新聞が手書きの「壁新聞」を貼り出した避難所など(□)



傾いたままの漁船や鉄骨の骨組みだけになつた魚市場を見て、「まだ、復興どころではないのでしょうか。道のりは険しいですね」と肩を落とした。

手記者。昨年、結婚したばかりの妻(24)は無事だったが、自宅アパートは浸水で住める状況ではなく、被災した他の社員とともに、夫婦で社長室に寝泊まりして

「港は元気だ」というメッセージを地元に届けたいんです」。湾内で停泊して



星裕仁さん

から届いた死「者名簿」をソコンに打ち込んでいた時、友人と同じ名前を見つけ、手が止まつた。人違ひだつたが、不安で涙があふれた。

「漁業者が救援物資搬送『海上ルートに光明』『緒にがんばろうな』」

秋山さんの記事に見出しをつけながら、久しぶりに温かい気持ちになった。

【22日】	午前6時	本社に泊まり込んでいる社員らが起床幹部会議。近江弘一社長が、戸別配達の再開に向け、住民が残っている家のリスト作成を指示
	午前9時	行方不明だった配達員の男性が社を訪れ、再会を喜び合う武内宏之・報道部長が、紙面のメニューを作成。編集制作部と協議して、紙面構成を決定
	午前10時15分	会社に寝泊まりしている社員の家族が、近くの給水所で、生活用水を調達
	午前10時40分	輪転機が回り出し、印刷開始
	午前11時半	本社入り口に新聞を積み重ねる。「ご自由にお取り下さい」の貼り紙を見た市民が、次々と手に取る
	午後0時50分	社屋に泊まる社員が夕食。近くのコンビニエンスストアで買ってきてドリアなど宮城県南部で震度4の地震。社内に緊張が走る
	午後1時50分	社屋に泊まる社員らが就寝
	午後6時	自宅や親類宅で寝泊まりする記者たちが、車に相乗りして次々と出社
	午後6時19分	報道部の打ち合わせで、前日取材したボランティア団体の活動をメインの記事とする方針を決定
	午後11時	武内部長が仕事を抜け、浸水した自宅の片づけへ。1週間ぶりの帰宅
【23日】	午前7時50分	
	午前8時	
	午前8時半	

しかし、陸に乗り上げて山さんは入社5年目の若

「港は元気だ、というメ

ッセージを地元に届けたい

輪転機止まり手書きで

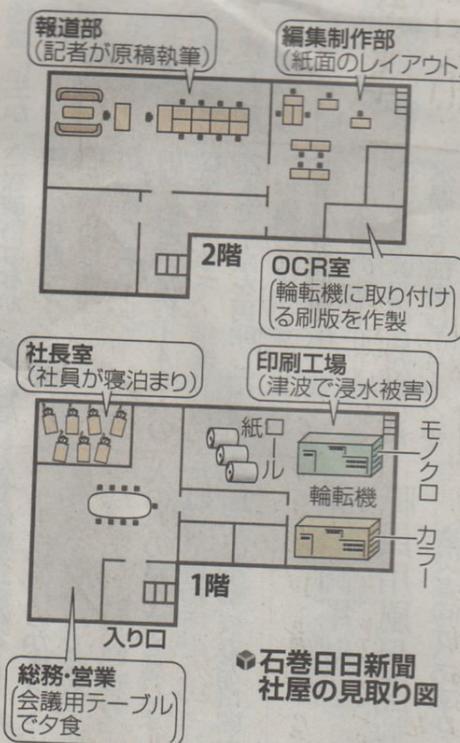
胸まで水かき分け取材



13日

14日

15日



16日

17日

地元漁師たちも「海が駄
目になつたわけじやない」

「港が元に戻れば、俺らは
いつでも魚を届ける」と前
向きだ。秋山さんは「事実
を伝えるのは大事だけど、
やっぱり、希望を持てるよ
うなニュースが書きたい」と
力強く話した。



桜井ちえ子さん

避難所には十分な照明が
ないため、日没までに新聞
を届けなければならない。

星さんは「機械を壊さない
よう、できるだけ、早く刷
りたい」と壁の時計に目を
やつた。

午後1時すぎ。手の空い

た記者や営業部門の社員
が、刷り上がりたばかりの
新聞を運び出し、車や自転
車に積み込む。社員は全員
無事だったが、販売店が流
されたり、連絡のつかない
配達員もいるからだ。

この日の配達部数は、計
5350部。すべて無料で、
47か所の避難所に配る。

星さんも約300部を載
せて、車で15分ほど離れた
避難所に届けた。

「新聞だ」。被災者
がどつと押し寄せ、持つて
きた新聞はあつという間に
なくなつた。

報道部から送信された秋
山さんの原稿が、正午過ぎ、
紙面作りを担当する編集制
作部の桜井ちえ子さん(28)
の手元に届いた。

桜井さんの自宅は無事だ
ったが、家を失った近所の
6世帯19人に部屋を提供し
ている。連絡が取れない友
人も多い。数日前、市役所

は、岩手県陸前高田市に住
み、自らも被災した船員だ
った。食料などの支援物資
を静岡・焼津港から積んで
きたといい、「お兄ちゃん、
頑張れよ」と、逆に励まさ
れた。

午前11時。水が引いた
後も、ヘドロのような土
砂が残り、油と一緒にな
って異臭を放つ印刷工場
内で、編集制作部の星裕仁
さん(26)が印刷用のロール
紙を慎重に輪転機に合わせ
た。

カラー印刷ができる輪転
機は水につかったものの、
電気が復旧して、18日には
パソコンを使い、19日から
はモノクロ印刷の輪転機で
新聞を発行している。